

海老名耕地用水路（相模川左岸水系） におけるテラピアについて

飯 村 武

On *Tilapia* Collected at Ebina Canal

Takeshi IMURA

はじめに

テラピア属 *Tilapia* はアフリカから中近東にかけての熱帯域を原産地とするカワスズメ科 Cichlidae の魚で、わが国には *Tilapia mossambica* が1954年に初めて輸入されて以来、今日までに数種が導入され、一部は放流されて、現在では琉球列島の沖縄島を初めとする若干の島々の水域で、また本州・四国・九州では温水の入る川および水田などで増えているという（宮地ら、1984）。これらの生息地は川の下流域で、かなり汚濁されているとも述べられている。このような状況の中で、神奈川県でもテラピア属が野生化している話を聞くようになり、越冬、定着、繁殖などに関心がもたれている。

ところで、テラピア属の野生化調査はその緒についたばかりで、本県では多摩川、鶴見川および酒匂川の3水系での生息記録（斎藤、1984）を、また中村（1984）が、1981年10月と'82年11月に鶴見川（位置は横浜市緑区と港北区）で採捕し、定着繁殖の可能性のあることを報告しているにすぎない。筆者は1983年10月に相模川左岸水系においてテラピア *Tilapia nilotica* を採捕し、さらに聞き込み等により、生息状況について若干の知見を得たので報告する。

なお、採捕個体の同定は神奈川県立博物館の中村一恵専門学芸員にお願いした。ここに厚くお礼申し上げる。

採捕位置と環境

採捕された地点とその周辺の概況を図1に示す（①、筆者により採捕された地点）。すなわち、採捕されたのは相模川左岸水系の海老名耕地用水路で、県道藤沢厚木線が交差する地点から下流約50mの位置である。

採捕されたのは1983年10月8日の15時15分、鮒釣りの仕掛けで、餌はミミズであった。採捕地点（釣り上

げられた地点）を図2に示す。この場所の水路幅は約13m、水深は約1mであった。採捕地点から約10m上流の位置で2つの水路にわかれる（図1および図2参照、この2水路の合流点から相模川合流点までの水路を地元民は貫抜川と呼んでいる）。図2において、向って左の水路（西水路と呼ぶ）の幅は3.5m、右の水路（東水路と呼ぶ）の幅は5.5mである。西水路の流れはごく緩やかであるが、東水路はかなりの流速で貫抜川に流れ込んでいる。しかし、貫抜川の川幅が上流2水路のそれに比べて広いので、採捕地点での流れはごく緩やかとなり、いわゆる水のよどんだところとなっている。

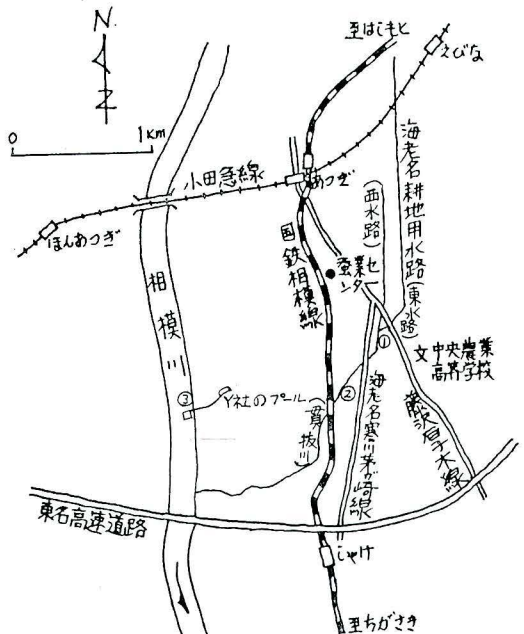


図1 テラピア・ニロチカの採捕地点と周辺の概況
①筆者により採捕された地点；②採捕が報告された地点；③筆者により採捕が確認された地点

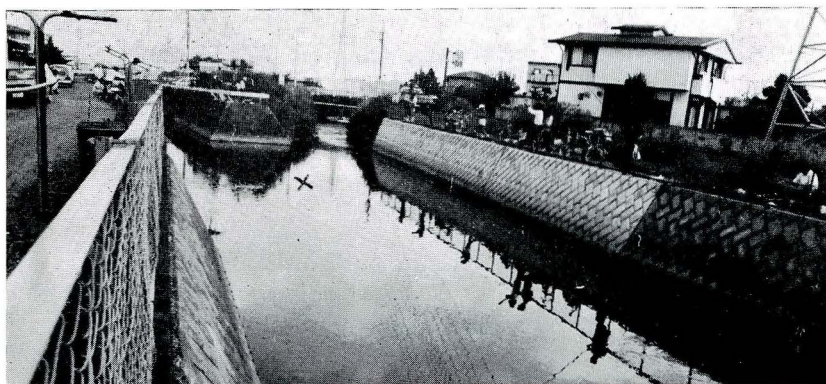


図2 テラピア・ニロチカの採捕地点（×印のところ）

水路は水田灌漑用のものであるが、沿岸では最近宅地化が進み、生活排水が流入し富栄養化が進んでいる。採捕時の水温は17°Cで、河床にはヤナギモの群落が散在的に繁茂している。

なお、この場所は好適な釣り場で、フナ類、オイカワ、モツゴ、アブラハヤなどが頻度高く釣れ、まれにコイ、ナマズなどが釣り上げられている。

採捕個体の計測

筆者により採捕された個体を図3に示す。この個体の体各部の計測値はつぎのとおりであった。

体重、47.5gr；全長、130mm；標準体長、108mm；尾叉体長、128mm；体高、39mm；頭長、33mm；体盤長、34mm；肛門長、71mm；吻長、11mm；前吻長、2.5mm；尾柄長、17mm；尾柄高、14mm；眼窩高、7mm；両眼間隔幅、12.5mm；上顎長、7mm；口幅、9mm；胸鰭長、29mm。

生息についての聞き込み調査

1985年10月10日に、海老名耕地用水路におけるテラピアの生息状況の調査を行った。調査方法は釣人により当日釣り上げられたものを確認することと過去の体験を聞き、これを記録することである。その結果、当日釣れたものはなかったが、体験談では貫抜川で釣れるのはまれではなく、とくに①の地点（図1において筆者により採捕された地点）および②の地点（図1において採捕が報告された地点）でよく釣れるとのことであった。①の地点では数年前からで、最近では以前に比べて頻度高く釣れ、その大きさも200mmに及び、さらには貫抜川で越冬し、繁殖しているのではないかと語っていた。

貫抜川の②の場所の状況を図4に示す。水は緩やかに流れ、土堤にはススキやヨシを主とする高茎草本が

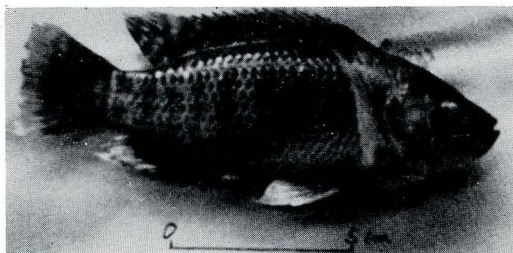


図3 筆者により採捕されたテラピア・ニロチカ



図4 採捕が報告された地点の状況

繁茂し、これら草本類が両岸から水面のかなりの部分を覆っていた。また河床には各所にヤナギモが繁茂していた。釣人の1人は1985年9月30日にテラピア2個

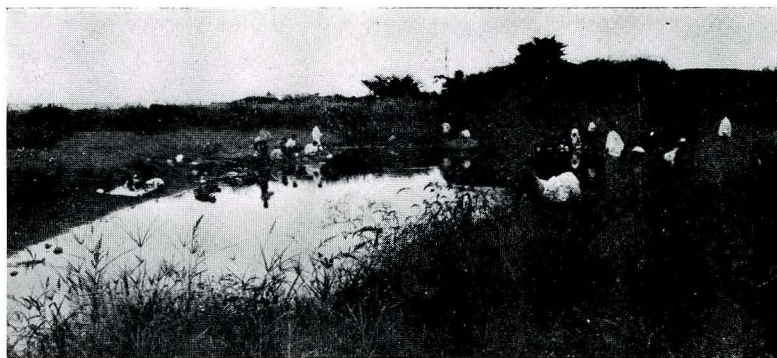


図5 テラピアが釣れる相模川河原内の池（筆者により採捕が確認された地点）

体を釣り上げ、その全長はいずれも約300mmあったと述べ、さらには釣れる個体が年々大きくなっていると語っていた。中村（1984）によると、テラピアは水温が 10°C 以下になるとわが国の大部分の河川などでは越冬出来ないと述べている。貫抜川も例外ではなく、冬期に氷が張るといった状況はないが、水温は 10°C 以下になることを指摘しておきたい。

つぎに、図1における③の地点で採捕が記録されている。この場所は相模川の河原に形成された面積約15aの池（河原の池）で、テラピアが頻度高く釣れ、子供たちの釣り場として人気がある。この河原の池の東側には土管が通じていて、水（温水）が流入している。これは東方約200mの距離にあるY社のプールの過剰水であるという。

河原の池の状況を図5に示す。水深は最深が約80cm、岸の一部にはヨシが、また池床には散在的にヤナギモが繁茂している。筆者は1983年10月下旬に、この河原の池で釣り上げられたテラピアを釣人にみせてもらったが、その全長は170mmであった。なお、河原の池の水温は冬期でも約 14°C 以下になることはなく、フナがよく釣れている。

ところで、Y社では1968年に30頭のテラピアを飼い始め、今日に及んでいるという。飼養の場所は構内に設けられたプール（前述、縦約60m、横約25m、深さ約1.5m）で、このプールの過剰水（温水）が土管で河原の池に導びかれているものである。プールで飼育しているテラピアは年々増殖し、ときとして土管を伝って河原の池に到達しているとのことであった。

おわりに

テラピアの野生化についてのこのたびの記録は、神奈川県では斎藤（1984）および中村（1984）の報告に

つぐものであり、相模川水系での記載は初めてである。筆者が調査した場所でのテラピアの生息は、地元民が語っているように、Y社で1968年から飼われているテラピアがそのもとになっていることは明らかである。問題は、テラピアがどのような経路で海老名耕地用水路（貫抜川）に生息分布するようになったかであり、さらには貫抜川で越冬、繁殖しているか否かである。

越冬および繁殖の問題はともかく、生息についてはつぎの二つの経路が考えられる。その一つは人為による直接放流であるが、近隣で飼養しているので、その実施はきわめて容易であるといえよう。他の一つは河原の池経由で貫抜川を溯上するものである。すなわち、河原の池の水は河原に流れを作って相模川の本流に流れ込んでいるので、河原の池と貫抜川とは本流を介して連結している。つまり、テラピアは流量が多く、水温の高い夏期に河原の池から本流に出、やがて貫抜川を溯上するのではないかと考えられるものである。ちなみに、これまでのところ直接に放流したという話は聞いていない。

貫抜川での越冬、繁殖の可否は今後の調査に期してまたれるが、河原の池は冬期でもかなり高い水温を保っているから、ここでは越冬、繁殖しているのではないかと推察される。

文 献

- 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦 1984 原色日本淡水魚類図鑑（全改訂新版）。保育社、東京。
中村一恵 1984 鶴見川で採れたティラピアについて。神奈川自然誌資料、(5): 57—60。
斎藤和人 神奈川県の淡水魚類分布—神奈川県の水生物。第6報、神奈川県環境部水質保全課。
(神奈川県立自然保護センター)